

オーストリア学派の出発点の一つに光を当てる

経済学の時代性を社会的な
視点を交えながら論じる

江頭進

経済学史の中で、著名な研究者を擁しながら、日本ではその発達過程や意義がいまだによく知られていない学派の代表がオーストリア学派である。たとえば、この学派に属する社会学者として、日本では特にハイエクが他の一般の経済学者と比べても高い人気を誇っている。にもかかわらず、彼が考え出した概念のほとんどが19世紀末から20世紀初頭のウィーンで活躍した初期のオーストリア学派の研究者によって提出されたものであるということを知る人は少ない。この意味で、オーストリア学派の出発点の一つに人物伝を交えながら光を当てた本書は、表面的な理解をさがしがちな現代オーストリア学派の主張を理解する上でも重要な意義をもっている。

本書は、著者の前作『オーストリア経済思想史研究—中欧帝国と経済学者』（名古屋大学出版会、1988年）以降の約15年間の文献研究などをまとめたものである。本書は二部から構成されていて、第一部はマックス、カール、アントンのメンガー三兄弟が主役であり、第二部は、ベーム・バヴェルク、ミーゼス、シュンペーターの3人の個別の議論が新資料をもとに検討されている。だが、本書を特徴づけているのは、やはり前半のメンガー三兄弟の分析であろう。筆者の知る限り、メンガー三兄弟の影響関係について本格的に採り上げた邦文研究は他にない。

著者は、最初の数章を使って次男の経済学者カールが後継者たちに残した二つの重要な考え方である「有機的」社会現象論と自由主義を主に採り上げる。この二つは、19世紀末の経済学方法論争の隠れたテーマであるのと同時に、ハイエクら20世紀の自由主義者たちの一部に大きな影響を与えた。「有機的」社会現象論は、歴史学派との論争の最中にカールが歴史法学を高く評価する中で現れる。だが、法学者であった弟アントンはこの概念をむしろ社会的集団の勢力関係の観点から批判的に捉える。むしろ、自生的に生まれた制度を理性的に再解釈する必要があるとするアントンの主張はウィーンの法学者ハンス・ケルゼンへとつながっていく流れの中にあると考えられるだろう。

二人の弟が学究の徒としての人生を歩んだのに対し、長兄のマックスは政治家としてハプスブルグ帝国の非常に不安定な時期を生きた。マックスは基本的には国家の活動の基本は市場の自由な取引にあると考えていた自由主義者であったが、それは同時代のイギリス中産階級に広がっていたような自由放任思想とはほど遠いものであったことが本書の中では明らかにされている。安易な労働者保護といったものには反対していたが、彼は社会政策や経済政策の必要性を明らかに認識していた。マックスの視点は、常に長期的なものを含むことを忘れず、短期的な経済介入や保護が長期的には保護すべき対処や国民経済全体にマイナスに働くことを見通している。しかしながら、「有機的」社会現象論にしてもマックスの自由主義論にしても、どこかに当時のウィーンの多くの人々が抱えていた「ドイツ民族共同体」への郷愁を匂わせる。本書の著者は、マックス、カール、アントンの三兄弟に、やがて第一次大戦と帝国の滅亡、そしてその後のファシズ

ムの台頭へと続く歴史の大きな流れの世紀末ウィーンの知識人の最後の抵抗を象徴させている。だがそれ以上に、その抵抗さえも大きな流れへと流れ込ませせらぎの一つであり、20世紀初頭のドイツ語圏の知識人がファシズムの台頭に対して無力であったことの原因が彼らが提出した議論自体の中にあることが、本書を読めば理解できるであろう。

本書の前半がメンガー兄弟へのアンソロジーであるのに対して、後半はオーストリア学派の理論的、思想的な発展史にかんする論文を集めたもので構成されている。たとえば、ベーム・バヴェルクの資本理論の形成にかんする章では、古典派理論との関係の中からベーム・バヴェルクがいかに独自の議論を導き出したのかということを中心論じられている。また、シュンペーターの社会進化論についての新しい資料に基づいた分析も興味深い。現在、一般的には技術や企業の革新を基礎とした経済発展理論のことをシュンペーター的経済成長理論と呼ぶことがあるが、現在の状況がどの程度までシュンペーター自身が考えていたこととつながりがあるのか、ということを考える上での新しい材料を筆者は提出している。

本書の著者の特徴は単なる経済学の歴史の研究ではなく、経済学者あるいは経済学の時代性を社会的な視点から交えながら論じる方法にある。その結果として、社会を論じる学問としての経済学の問題の深さ、複雑さ、そして経済学者が答えを求めることの難しさが浮き彫りになるのである。

(小樽商科大学助教授)